入選

笑顔をつなげる

鹿児島県　有明中学校　三年
下戸　良佑

「おはよう。下戸くんが来たからほら、雲が切れてお日様が出てきたよ。」
　少しくすぐったくなるような言葉だが、優しい笑顔につられて私も自然と笑みがこぼれた。
「おはようございます。今日は暑くなりそうですね。」
しかし、１年前の今ごろは、こんなに自然に笑える日が来るなんて思ってもいなかった。同級生４名の小さな島の学校から転入してきた当初、私は人の多さやにぎやかさにとまどい、友達とどんな話をしたらいいのか、どんな風に笑ったらいいかさえ、わからなくなっていた。みんなが自分をどう思っているか、悩む日々。毎朝、軽いため息をつきながら登校していた。そんなとき、
「おはよう。今日もいい天気だね。」
近所の写真館のおじさんだった。ふと顔を見上げると、そこには私を包み込むような穏やかな笑顔と、突き抜けるような青空があった。
「お、おはようございます。」まぶしさを感じながら、私はあいさつを返した。
暑い日も寒い日も、風の強い日も土砂降りの日も、おじさんは毎朝交差点に立ち、私に代わらない笑顔とあいさつをくれた。
「テストはどうだったかい。」「いやあ、ちょっと難しかったですね。」
「運動会の練習は進んでいるかい。」「はい、がんばっています。」
何気ない会話であったが、温かい気持ちになれた。笑顔とあいさつと短い会話。この魔法の３点セットは私の心をゆっくりと、だが確実に明るく前向きなものに変えてくれたのだった。
そんなある日、私はふと気になったことを聞いてみた。
「おじさんは、いつからここであいさつをされているんですか。」
「うん。最初はね、自分の孫を見送りたくて始めたんだけれど、もうその孫が20歳だから14年くらいになるかな。今はみんなの笑顔が嬉しくて、続けているねえ。」
私は驚いた。きっかけは自分のお孫さんだったのが、10年以上も毎日続けており、そして結果的に私の気持ちにも変化を与えてくれたのだから。おじさんはもちろん私だけでなく、その交差点を通るみんなに笑顔であいさつをし、安全に横断できるように見守り、車の運転手さんたちにも手をふっている。
まるで、おじさんが交差点の朝を操っているかのように。毎日その変わらぬ光景が、私に安心感と１日の元気をもたらしてくれる。
「私も誰かの心に明かりを灯すことはできるだろうか。私が笑顔にしてもらえたように、私も笑顔をつなぎたい。」
そう強く思い、私は今朝早く登校し、校門であいさつ運動を行っている。眠い日もあるし、面倒だなと思ってしまうこともある。だが、続けることの大切さも教えてもらったので、がんばりたいと思う。今までは受け身だったあいさつを自分から行うようになって、さらに気持ちは明るくなった。
「おはようございます。今日もいい天気ですね。」
「おはよう。いってらっしゃい。がんばっておいで。」
今日も笑顔がつながる。心地よい初夏の風が、私の背中を軽く押してくれた。